

① 第1回 天白生涯学習センター 公開講座

水 害 に 備 え る

～東海豪雨から学び、生かす～

1. 日 時：令和2年11月19日（木） 10：00～12：00
2. 場 所：天白生涯学習センター 第1集会室
3. 主 催：名古屋市教育委員会
4. イベント名：令和2年度 後期主催講座
5. 参加者人数：11名
6. 講 師：NPO法人 愛知県防災士会 防災士

櫻井 衛

7. ファシリテーター：原田

天白生涯学習センター令和2年度後期公開講座開催に際し、新型コロナウイルス感染防止策を講師と参加者全員に、検温、マスクの着用、手の消毒をし、ソーシャルディスタンスによる人と人との距離を空けての着席で行われました。



最初に天白生涯学習センター新実館長様から参加者に対し資料や注意事項のご案内と空調及び体調不良の際にお申し出頂くお願いがあり、その後に館長から紹介される櫻井講師の紹介をして頂きました。

冒頭、千葉県で介護施設を運営している講師の知人から聞くことが出来た令和元年9月9日の台風15号と10月12日の台風19号による暴風雨の被害状況について説明がありました。

千葉県鋸南町では現在もブルーシートで屋根の部分を覆っている家屋があり、被災当時は、7万4千戸もの大規模的な家屋の被害が発生しました。その教訓を活かし、今日では、屋根瓦が飛んだ場合を想定した補修方法として、専門家が講師となりブルーシートの張り方教室を行っているとのことでした。

次に20年前に台風14号と秋雨前線がもたらした東海豪雨が庄内川を越水し、主に新川町と西枇杷島町に床下浸水1,240棟、床上浸水6,300棟と大きな被害を与えた。東海豪雨は、この生涯学習センター近くの天白区野並地区などでは、排水ポンプが浸水し、使えなくなったことにより被害が拡大した事例にも触れ、7割くらい水没した市営交通バスの写真は、当時の悲惨な状況を物

語っていました。

続いて、61年前に日本列島を縦断した「伊勢湾台風災害を振り返る」は、9月26日の夕方和歌山県潮岬に上陸し、その後の進路と日時の表をパワーポイントで示しながらの説明は、当日の気象情報が今より薄く、台風情報の伝達方法と災害対応への意識の不備によると振り返り、戦後急速



に埋め立てなどをして都市化した住宅地が浸水した事と、大量の木材需要により、貯木されていた流木が堤防を破壊した戦後の日本の社会状況を現した災害であるとの説明でした。

災害と法律の関わりとして、過去の災害の都度色々な法律が作られた。

1946年 南海地震 ⇒ 1947年 災害救助法

1947年 カスリーン台風 ⇒ 1948年 消防法

1948年 福井地震 ⇒ 1949年 水防法

1950年 建築基準法

1959年 伊勢湾台風 ⇒ 1961年 災害対策基本法

などが決まり1993年の阪神・淡路大震災や2011年の東日本大震災では、1961年の災害対策基本法が新たに改正されている。

「令和元年東日本台風から学ぶ」のタイトルから、台風19号による長野県穂保地区被害の状況を講師から説明があり千曲川周辺の浸水状況とハザードマップで浸水が想定されている範囲が一致し、住んではいけない場所の情報を入手することにより、リスク回避ができること、そして、宮城県丸森町豪雨災害でも、山間部に降った雨が小規模河川から主流「新川」へ流れたため水位が上昇し、内水氾濫と決壊が起きたことの説明がありました。

なお、誤解されやすいケースとして、期限切れのペットボトルの水は食品表示基準により賞味期限が過ぎても飲むことができることが伝えられた。これは、ペットボトルには通気性があり、中の水が時間とともに少しずつ蒸発するため、計量法の規定で内容量を正しく表記する必要があることから、表示どおりの内容量が保てる期限を賞味期限として示しているからだ。

「内水氾濫の脅威」では武蔵小杉のタワーマンションで、内水氾濫により逆流してトイレが使えない状態になり、その教訓を活かし、簡易トイレの常設や脱臭剤と凝固剤とビニール袋をセットにした携帯トイレを常備しておくことの良いことの説明に続き、「台風19号からハザードマップの限界を学ぶ」から問題点として①ハザードマップに対する認識の違い、②屋外へ移動した結果14名が死亡では、気象状況に応じて対応することへの考えが浸透不足と説明され

た。

「被災地から学ぶ」からは、北海道で起きたブラックアウト（停電）から見えてきたことを上げ、①カード社会の落とし穴、②オール電化の弊害、③スマホ・携帯電話の充電、③エレベーター停止、そして、被災地から見えてきたこととして①乾電池・カセットコンロ・カセットボンベの買い置き、②ペットボトルの有効利用、③ゴミ袋45Lの有効利用、④飲み水の確保、⑤非常食の確保、⑥トイレの確保、最後に7日分の家族の食料と共に自宅で避難生活ができるような自助の備えが今、強く求められる事を強調。

「巨大化する災害から生き残るために」は①何が何でも、食料品・飲料水の備蓄、②自分の命は自分で守る、③長期間止まる覚悟のライフライン⇒代替品を常に準備しておく、④大切な動産に火災保険・共済保険を⇒家を失ったひとは、再建や二重ローンの苦しみを背負い生活をする事になる、⑤自分の物は自分で守る、⑥避難所での生活を迫られたら、と続き⑦東日本大震災の避難所トイレ4割が劣悪（トイレの汚物処理が出来ず、衛生状態悪化）⇒感染症にかかり、下痢・嘔吐の症状⇒既設・仮設トイレでも排水できず汚物が溢れている⇒食事・寝るところに簡易トイレの設置が多い現状と、⑧女性がトイレの回数を減らすため、膀胱炎が増加・水分不足からエコノミークラス症候群への注意と、⑨一家に一台のトイレを常備、⑩自分の身体は自分で守る、⑪避難所は三密を避けることの徹底が求められている今日は、家族で身近な危険な場所を発掘・確認してみる事が大切で、みんなで我が家の防災マップを作成することが防災アイテムとして必要となりますと話された。

最新情報としては、[避難行動判定フロー]並びに[自らの命を自らが守るハザードマップと避難行動判定フロー]を示した後に、中部地方整備局の台風19号級が庄内川水系を襲った場合、想定雨量は東海豪雨の約1.4倍というシミュレーションを示し、氾濫は名古屋市内全域に広がるように発生すると共に、JR新守山駅では約6.4m、名古屋駅では約3mの浸水が発生すると予想されました。

昨今の台風及び豪雨の被災状況を改善するため、スーパーコンピューターシステムの活用により、熱帯低気圧の予測精度を向上させたことや熱帯低気圧の5日先までの進路などの予報を伝えることによる避難勧告を出し、尊い命を守る行動へ結び付けたいとしています。

また、台風19号の教訓から災害時の住宅再建支援の拡充が決定され、6つの被害区分で再建支援の受けられる事の説明がされた。

古文書から見える災害と事例からは、昔の絵図と現地とを比較した場合、ここ天白区はほとんど埋め立てられたという事実を把握して頂きました。

大規模災害に関するタイムラインでは、防災行動計画の重要性と活用について

て、発災後の対応だけでなく発災前の対応が鍵となり、大規模地震災害と大規模風水害の区別や自分と家族と会社、どこにいるか、あらゆることを想定しながらの防災行動計画を策定することが大切な行動指針となります。

講師から最後に「本日のキーワード」としまして

防災⇒減災

- ・まず、自分が生き残ること。
- ・そして家族、地域の人と一緒に災害に立ち向かうこと。

地道な対策や訓練の積み重ねが「減災」につながる事をお示し終了。

参加者の皆様からは、大きな拍手を頂き閉会となりました。

今回の天白生涯学習センターを通じたの名古屋市民公開講座ということもあり、天白区からは遠い東特会館がある中村区亀島にお住いの方も参加され、防災に関して、かなり勉強を積まれた方々がお集まりになられたという印象が強く、15分間の休憩時間中も質問の嵐となり、講師はお一人おひとりに親切・丁寧に回答する時間となりました。

文責・写真：原田 友子